

くまもと

379号

日本郵趣協会
熊本支部会報
2023.7

16円「穂高岳」産業図案と長野平和博覧会

出口泰文



産業図案



長野平和博覧会

産業図案 16円「穂高岳」と長野平和博覧会 16円「穂高岳」を皆さんは、どのように見分けしていますか？

正直言って、自分でも確信が持てません。
今回、この16円「穂高岳」について述べさせていただきます。



産業図案



長野平和博覧会

昭和23年9月1日外国郵便の料金改正が行われ、船便書状の基本料金が4円から4倍の16円になり、これに適應する切手として昭和24年1月15日、16円「穂高岳」が発行されました。

問題は、その後すぐの昭和24年4月1日に、同一原版を用いて刷色の僅かに違う長野平和博覧会記念切手が発行されたことで、混乱が生じました。

産業図案16円「穂高岳」が濃い群青、長野平和博覧会記念切手16円「穂高岳」が濃い青とカタログには記載されています。

しかし、青・群青という色の違いがいまいちなのに、濃い青・濃い群青となるともはやお手上げ状態です。この2種の違いをどの様に見分けるか、今まで悩んでいました。先ずは、確実に区別する方法として耳紙付きのブロックが入手できましたので、提示します。1ページをご覧ください。

両者の違いをのべますと、産業図案16円「穂高岳」は1シート50枚、上抜け楕型目打ち、銘版位置が48番です。

長野平和博覧会記念切手16円「穂高岳」は1シート20枚、逆楕型目打ちです。銘版位置は19番です。

従って、下耳の抜けを見れば上側が産業図案16円「穂高岳」で、下側が長野平和博覧会記念切手16円「穂高岳」と意外と簡単に見分けられました。

これを参考に両者の色の違いを見てみると、自分なりに産業図案「穂高岳」が濃い青(群青)、長野平和博覧会記念切手16円「穂高岳」が薄い青(少し緑っぽい)感じに見受けられます。1ページのコピーでは、その色の違いをはっきりと表現されていません。長野平和博覧会記念切手は、長野局・同博覧会内出張所・麻布局限定発売、昭和25年9月4日以降全国発売された。

結論として、確実に基準となる切手が必要で、それを基準として判定することをお勧めします。

産業図案切手の1枚として発売された16円「穂高岳」は、産業復興に向かう戦後日本の姿をテーマに切手の図案を統一するという趣旨から外れ、統一を乱しています。

この切手は外国船便書状郵便の料金用で、普通切手では初の大型切手です。16円料金はS23.9.1~S24.6.1迄ですが、「穂高岳」の発行はS24.1.15ですので適正使用期間は、わずか4ヶ月半程しかありませんでした。

また、S22.8より外国航空郵便が再開され、基本料金16円に地帯別航空割増料金が加算されたエンタエアも存在しますが、当時外国郵便自体が少なくこのエンタエアも入手には苦労します。

凹版印刷独特の定常変種も報告されています。転写の際のガイドラインとみられる細い線が繋がった「日に線付き」は有名な版欠点(50番)です。



コラム

長野平和博覧会について簡単に述べさせていただくと、S24.4戦時中のために中止されていた長野県善光寺の御本尊様の御開帳が14年ぶりに再開されることとなりました。その御開帳に合わせて、S24.4.1~5.31まで平和博覧会が計画されました。

その開催にあたって、長野逓信局は記念切手の発行を逓信局に申請しました。これに対し、逓信省は準備期間の不足を理由として16円産業図案「穂高岳」の原版を流用し、刷色を変更し発行することとなりました。

これが、産業図案と記念切手の区別が面倒くさいという事態を引き起こした要因です。

全部で50万枚の記念切手の発行のうち、20万枚が地元割り当てられたが、売り上げは芳しくなかったようです。当時、封書料金5円の時代に16円と高額であったことも要因でしょうか。

初日の売り上げは8,024枚、以下2日目2,064枚、3日目1,881枚、4日目1,417枚、5日目503枚、6日目522枚、7日目375枚と^{さんたん}惨憺たるものでした。